

3 赤煉瓦を活かしたまちづくり

～京都府舞鶴市～



石原 雅章
ISHIHARA Masaaki

舞鶴市/産業振興部/観光まちづくり室/文化振興課長
特定非営利活動法人/赤煉瓦倶楽部舞鶴/理事

京都府舞鶴市では、過去に建造されて残されていた赤煉瓦建造物をまちの資源として捉え、まちづくりに活用する取り組みが30年前から行われている。どのようなきっかけで取り組みが始まり、現在に至るまで盛り上がっているのだろうか。

舞鶴市は京都府北部に位置し、若狭湾に面した港まちです。東・西に市街地があり、西地区は16世紀末、歌人としても名高い戦国の武将細川幽斎とその子忠興が田辺城を築き、城下町として発展してきました。一方、東地区は1901年、対ロシア戦略の日本海側の軍事拠点として、舞鶴鎮守府が開庁しています。一寒村に、港、鉄道、道路、水道などインフラ整備が急ぎ進められ、海軍のまちとして歩んできた歴史を有しています。

1945年の第二次世界大戦終了後、引揚港に指定され、1958年までの13年間にわたり66万人余りの引揚者と1万6千柱の遺骨を迎え入れており、『岸壁の母』の歌とともに引き揚げのまちとして知られています。

赤煉瓦のまち「舞鶴」

赤煉瓦を活かしたまちづくりは、1988年舞鶴市職員による自主研究グループの活動から始まります。日本海側の暗いイメージを払拭し、プラスイメージに変えようと活動する中、横浜市職員による研究会を訪問した際、横浜新港埠頭の赤煉瓦倉庫2棟を赤レンガパークとして活用しようとしていることを知ります。この時、自分たちのまちにも、数多くの赤煉瓦倉庫があることに気づき、活動がスタートしました。

1989年11月末から市所有の赤煉瓦倉庫をライトアップしたほか、赤煉瓦の調査を本格化させるため「まいづる建築探偵団」を発足。探偵団は全国で4基しか現存していない「ホフマン窯」という煉瓦を焼成する窯を発見するなど、毎週土・日曜日を利用し、市内を探索し、旧海軍が明治から大正期にかけて建設した施設を中心

に、倉庫、工場、水道施設、砲台、鉄道施設など約60の赤煉瓦建造物を確認しました。

その後、市内に残る赤煉瓦建造物を広く紹介し、まちづくりのきっかけをつくりたいと、1990年11月に「第1回赤煉瓦シンポジウム」を開催したところ、全国19都市から参加いただき、赤煉瓦について熱心な討議がされました。そこで専門家も含め多くの方々から、舞鶴が赤煉瓦建造物の宝庫であることがはじめて明らかにされたのです。このシンポジウムを機に、市民の活動組織となる「赤煉瓦倶楽部舞鶴」が発足しました。また、全国の赤煉瓦をつなぐ「赤煉瓦ネットワーク」も設立され、横浜に事務局が置かれ運営されています。

市民活動の盛り上がり

1991年8月3日、三方を赤煉瓦倉庫に囲まれた会場で、野外コンサート「赤煉瓦サマー・ジャズ・イン舞鶴」



写真1 第1回赤煉瓦シンポジウム（1990年）



写真2 赤煉瓦サマー・ジャズ・イン舞鶴（1991～2010年）

を開催しました。これは探偵団の顧問と団長がジャズ好きだったこともあり、ジャズピアニストの山下洋輔さんに依頼したところ、「祖父が明治の有名な建築家であり、面白い」と快諾いただき開催できることになったものです。以後、ジョージ川口、日野皓正、阿川泰子など一流ミュージシャンを招き、舞鶴の夏の風物詩となりました。

また、赤煉瓦倉庫を所有する海上自衛隊や民間倉庫会社へ要請したライトアップが実現したほか、赤煉瓦にちなんだお土産を各店にお願いし、煉瓦やホフマンをネーミングしたお菓子やお酒、かまぼこなど沢山の赤煉瓦商品が誕生しました。さらに、赤煉瓦倶楽部の活動として、冬の赤煉瓦倉庫を光で演出する「赤れんがライトアート」を開催するとともに、まちづくりへの市民の参加意識の高揚を図るため、赤煉瓦を使用し景観に寄与している建物を表彰する「舞鶴赤れんが賞」を創設したりしています。

これらの赤煉瓦倶楽部の活動などを通じて、赤煉瓦に対する関心も高まり、赤煉瓦倉庫近くにある海上自衛隊棧橋の塀や国道の横断地下道の公共施設、民間施設が赤煉瓦調に改修されるなど、赤煉瓦が各施設に意識的に取り入れられるようになりました。

2000年3月、神崎ホフマン窯を所有する企業が倒産し、競売の危機に直面することとなりました。赤煉瓦倶楽部では、この窯が赤煉瓦を活かしたまちづくりのシンボルであるとして保存運動を展開してきました。債権を持つ金融機関へ保存の要望書を提出したほか、全国から保存メッセージの募集や赤煉瓦保存基金の創設などを行い、競売後には地元神崎地区の方々の保存署名簿と全国から寄せられたメッセージを添え、新所有者に



写真3 赤れんがロード再生事業（2003年）

要望書を提出しました。2011年10月、ホフマン窯の管理団体となった公益財団法人舞鶴文化教育財団は、国や京都府の指導のもと、ホフマン窯の保存工事に着手し、2013年5月に窯の覆屋根や見学路等を整備しました。

2003年には中高生などが参加して、明治時代に建設され、後に土に埋もれていた赤煉瓦舗装道路「赤れんがロード」を再生する市民活動も実施されました。

これら市民の地道で継続した活動が、今日の「赤煉瓦を活かしたまちづくり」の原動力になったものと考えています。

赤煉瓦建造物の保存と活用

舞鶴市では、こうした市民の動きに応じ、取壊しが予定されていた国所有の赤煉瓦倉庫を転活かし、「赤煉瓦のまち舞鶴」を広く発信できる施設として、1993年11月に、世界でも類のない「煉瓦」をテーマとした「赤れんが博物館」をオープンしました。館内では、エジプトの日干し煉瓦や万里の長城の煉瓦など世界四大文明の煉瓦を中心に、国内外の煉瓦や煉瓦建物とその背景にある歴史等を紹介しており、現在、世界42カ国の煉瓦約1,900個を収蔵しています。

翌年には市民交流の場として多目的ホールや展示コ



写真4 赤れんが博物館オープン（1993年）

ーナーを備えた「舞鶴市政記念館」を、2007年には舞鶴の宝物を展示・紹介する「まいづる智恵蔵」を整備するとともに、毎年秋には、アート&クラフトフェアなど赤煉瓦倉庫群を会場としたイベントを開催しています。

1996年度には、日本ナショナルトラストの観光資源保護調査「舞鶴赤煉瓦建造物群調査」（委員長は日向進京都工芸繊維大学教授）が実施され、市内の赤煉瓦建造物114件の台帳を作成。舞鶴の赤煉瓦建造物の特質は、①残存遺構数の多さは全国でも屈指、②煉瓦造が集まって残っている、③市民の身近な所で活かされてい

る、④珍しい積み方が含まれている、⑤竣工時の用途や機能が多様であるとされました。

この調査の後、1999年に神崎ホフマン窯、2002年に北吸隧道と舞鶴市政記念館が国の登録文化財となり、2003年には舞鶴旧鎮守府水道施設（1構）、2008年には舞鶴旧鎮守府倉庫施設（7棟、附1棟）が国の重要文化財に指定されました。

2012年4月、舞鶴市が「平成23年度文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）」という栄えある表彰を受けました。この表彰は、長年にわたり市民と行政が協力しながら、赤煉瓦を活かしたまちづくりなど、地域の資源を活かした取り組みを続けてきたことが評価されたものです。

赤煉瓦を活かした観光まちづくりへ

2012年5月には「舞鶴赤れんがパーク」がオープンしました。新たな文化創造の場として、さらに2棟の赤煉瓦倉庫を「赤れんが工房」と「赤れんがイベントホール」として転活用し、周辺も散策できるようにしました。ここでは、若者が集うコスプレイベントやウェディング、ファッションショー、車やバイクの撮影会やミーティング、赤煉瓦倉庫や自衛艦などの舞鶴自慢のコースを走る「舞鶴赤れんがハーフマラソン」など多様なイベントが開催され新たな魅力を発信しています。



写真5 上空から見た舞鶴赤れんがパーク



写真6 舞鶴赤れんがパークオープン（2012年）

また京都府においても、府北部地域を京都市と並び立つ「海の京都」とも言うべき質の高い観光圏とするため、5市2町が連携して観光地域を形成する海の京都事業を推進しており、本市においては、赤れんがパーク周辺一帯を戦略拠点に位置付けています。このため2013年6月、赤れんがパークの魅力をさらに高めるため、CI手法等を用いた統一的なイメージ戦略を進める組織として、行政、観光協会、民間ディレクター、外部アドバイザー、市民等からなる「舞鶴赤れんがパークブランディング機構」を設置しました。赤煉瓦の雰囲気を活かしたソフト事業を展開するなど、赤れんがパークのブランド力を高め、観光客の誘客にも努めているところです。

翌年5月には、デビッドボウイやYMOなどミュージシャン等から圧倒的な支持を得ている鋤田正

義氏の写真展「鋤田正義展 SOUND&VISION」、7月には「海」をテーマとしたプロジェクションマッピングなど光のアートで赤煉瓦倉庫を彩る「赤れんがサマーイルミネーション」、10月には世界で活躍する和太鼓集団による「DRUM TAO 赤れんがパーク特別公演」など発信力のあるイベントを開催したほか、ブランド戦略の一環として、デザイナー北川一成氏による赤煉瓦倉庫と船をモチーフにした赤れんがパークのCIロゴを制作しました。

また、舞鶴ならではの魅力を発信するツアーとして、明治期に建設された砲台跡のハイキングや、旧

軍用水道施設北吸浄水場配水池でのアートNPOによるアートプロジェクト「時間旅行博物館」が開催されました。さらに2015年4月からは、海上自衛隊において旧舞鶴鎮守府府長官邸（東郷邸）を月1回公開するなど、赤煉瓦を含め歴史を活かしたまちづくりが着実に進展しています。

本年度からは、市において貴重な歴史遺産である赤煉瓦倉庫群を中心に、海・港・近代化遺産を活かしたまちづくりの実現に向け、赤れんがパークに隣接する赤煉瓦倉庫が残る防衛省用地の取得と活用などに着手しています。今後とも、市民が「舞鶴」というまちに対して誇りと愛情を持てるよう、市民の皆さんと協力・連携しながら「赤煉瓦を活かしたまちづくり」を進めていきたいと考えています。



写真7 舞鶴赤れんがハーフマラソン（2013年～）



写真8 赤れんがサマーイルミネーション（2014年）